

## I-4

## 日本人多発性骨髓腫における IL-10 592 多型解析

斉藤貴之<sup>1</sup>、笠松哲光<sup>2</sup>、松岡 瞳<sup>2</sup>、遠藤みゆき<sup>2</sup>、井上まどか<sup>2</sup>、半田 寛<sup>2</sup>、小河原はつ江<sup>2</sup>、山根有人<sup>1</sup>、入澤寛之<sup>1</sup>、横濱章彦<sup>1</sup>、松島孝文<sup>1</sup>、塚本憲史<sup>1</sup>、唐沢正光<sup>1</sup>、野島美久<sup>1</sup>、神保貴宏<sup>3</sup>、澤村守夫<sup>4</sup>、村上博和<sup>2</sup>

群馬大学血液内科<sup>1</sup>、群馬大学医学系研究科保健学専攻<sup>2</sup>、公立藤岡総合病院<sup>3</sup>、西群馬病院<sup>4</sup>

【目的】IL-10 は、炎症制御因子として知られ、多発性骨髓腫(MM)細胞においては、細胞増殖や生存との関連が示唆されている。しかしながら、IL-10-592 多型が MM の発症や進展に關与するかは明らかでない。今回、我々は MM、monoclonal gammopathy of undetermined significance (MGUS)、健常人の血液および骨髓 DNA を用いて IL-10 産生量を変化させる多型である IL-10-592 の多型について検討した。【方法】MM と診断された患者 58 名 [(IgG 34 名、IgA 12 名、IgM 1 名、BJP 9 名、非分泌型 2 名)、34~87 歳(中央値 61 歳)、男女比(26:32)]と、MGUS 31 名、健常人 185 名について検討した。QIAamp<sup>®</sup> DNA Blood Kit およびフェノール/クロロホルム法により DNA を抽出し、Rsa を用いて PCR-RFLP 法により IL-10-592 多型を決定した。【結果】MM においては、健常者に比し、IL-10-592A/C genotype(IL-10 高産生型)が有意に多く(OR, 2.15; 95%CI, 1.17-3.93; p=0.012)、一方 IL-10-592A/A genotype(IL-10 低産生型)は有意に少なかった(OR, 0.52; 95%CI, 0.27-1.00; p=0.047)。さらに、MGUS から MM へ移行した 6/7 例(86%)は、IL-10-592A/C genotype を有していた。予後解析においては、有意差を認めなかったが、IL-10A/A genotype は、IL-10-592A/C や IL-10-592C/C に較べて予後が良い傾向があった。MGUS は、健常者と変わらず、IL-10-592A/C 多型との関連は認められなかった。IL-10-592A/C 多型は、人種差が著しく、IL-10-592C/C(IL-10 高産生型)は、日本人は 10% のみで、今まで報告されてきた Caucasian 35% と較べると低かった。【結論】今回の結果は、IL-10-592A/C 多型が、日本人 MM 患者において MM の発症と予後に關与することが示唆された。IL-10-592A/C 多型における人種差は、骨髓腫発症頻度に影響する可能性も示唆された。